心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ⑫

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

大輪の花火

毎年、夏になると思い出す想い出が皆さん一つや二つあるのではないでしょうか。

地元での花火大会。1975年当時、高校生の私は同級生の女の子とそこで初めてのデートにこぎつけました。3度目のアプローチでようやく。

花火大会当日、夕暮れ頃多くの人で埋め尽くされた会場近くの橋で待ち合わせしました。なかなか来なくてやっぱり駄目だったのかと思っていると、人ごみの中から彼女が現れました。その瞬間、周りの雑踏が消えて彼女の「お待たせ」という声だけが響いたように感じました。ぎこちない会話を繰り返しながら縁日屋台の人ごみを抜け、花火が上がり始めると、お互いの話題探しは終わり、触れ合う手をお互いに意識しながら夜空に打ちあがる大輪の花火に見入っていました。

高校卒業後、彼女とは大学進学を機に大阪と博多と離ればなれになり、次第に疎遠になっていきました。大学卒業後、私はUターン就職組で地元の岡山に帰ってきました。地元の商工会議所では花火大会を運営していて、当日の運営はもとより花火の協賛集めも仕事の一つでした。

商工会議所の手伝いをしていて数年経った夏のある日、新規で大口の花火の協賛が決まったと聞きました。珍しいのでどこの会社かと聞いてみると、なんと、私が付き合っていたあの彼女の実家の会社でした。

決して大きな商いをしているような会社ではなかったので、驚きましたが、理由を聞いてさらに驚きました。

知人が飛び込みで訪問したところ、たまたま社長がいらっしゃって「今年、娘が病気で亡くなったから大好きだった花火大会で花火を上げてやってほしい」とのお話だったそうです。

まさかと思いましたが、一人娘でしたので間違いありません。胸が締め付けられる想いでした。

その年の花火大会は人出も例年より多く、雲一つない夜空でした。その日も朝から準備と運営でバタバタと時間が過ぎていました。地元の人を中心に多くの人出でにぎわっていました。いよいよ花火の時間。花火の協賛社には招待席が割り振られます。彼女のお父さんも招待席に家族で来ていました。

私はそっと持ち場を離れて、高校生当時彼女と花火を見た防波堤に向かいました。穴場的な場所なので、人気のあまりないスポットです。見渡すとちょうど私が当時彼女と見た防波堤に中学生か高校生ぐらいのカップルがいました。

まるで10年前にタイムスリップしたかのような感覚を覚え、その瞬間、涙が頬をつたいました。

花火の音が体中に響いてきます。グッと込み上げるものを押さえ、花火を背に持ち場に戻りました。

あれから30年。
今年も花火の季節になりました。

あなたの町のアーバンホール

われ未だ生を知らず、いずくんぞ死を知らんや。
孔　子

生きているということも、死ぬという事もとても難しい命題です。
私たちはふだん生きているという事を意識することも少ないでしょう。
日々の時間の中で「生」と向き合う時間も大切にしたいものです。

葬儀・法要・ギフト　アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール「ちょっといい話」係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。